

# 日蓮の宗教政治思想

## ——仏教的王権論の中での位置づけ——

S・H・シヨマクマドフ

前川健一 訳

バルクリシユナ・ゴウヴィンド・ゴーカーレーは、論

文「初期仏教の国家論」の中で、仏教の王権論に見られる三つの段階について述べている。最初の段階は、『長阿含経』の中のマハーサンマタ（民主）の説話<sup>(1)</sup>に示されているように、国家が社会契約によって成立したという理念を強調するものである。第二の段階は、全世界を治める最高の王「転輪聖王」のあり方を提示する。最後に、第三段階では、国家が法を実現する倫理的手段となるという宗教国家の理念が発展させられる。ここでは、全ての衆生を救うという菩薩のすがたが前面に

現れる<sup>(2)</sup>。

このような三段階、すなわち、最初の王であるマハーサンマタについての仏教説話、転輪王に示される仏教的王権論、仏教的宗教国家論の三つは、国家機構に関する別個の理念ではなく、仏教を国家宗教として合法化する過程における幾つかの局面である。

仏教にとつて最も都合のよいチベット<sup>(3)</sup>の宗教国家モデルは、我々によく知られている。しかし、残念なことに、我々（たとえば、西洋の東洋学者）にとつて、日本における宗教国家思想はわずかしら知られていない。

それは、最澄（天台宗）と日蓮（日蓮宗）のものである。

八世紀の終わり、日本では新しい都・平安京（現在の京都）が誕生した。この出来事は日本中世史における新しい時代——平安時代の到来を示すものであった。九世紀から十世紀にかけて仏教は日本における公的思想の発展を決定した。そして、二つの新宗派——天台宗と真言宗——が平安時代の文化的特性を生み出した。

日本天台宗の教理的基礎は中国天台宗の教義である。中国天台宗は六世紀前半に創始された。その実質上の開祖は智顛（五三八〜五九七）である。智顛の主張によれば、『妙法蓮華経』（法華経）は仏教思想の聖なる真理を体現した「聖典」である。天台宗の法華経解釈の特徴は、その題名を神聖視した点にある。

「妙」とは、「素晴らしい」とか「聖なる」といった意味であるが、智顛は「相待妙」「絶待妙」という二つの妙に区別する。法華経に説かれる仏法は、全ての仏教経典の中で相対的に素晴らしいもの（相待妙）である一方、涅槃に導く絶対的に素晴らしいもの（絶待妙）でもある。

「法」は、広義には、仏の教えであるが、狭義では、法華経に体现された教えである。それは同時に天台宗の教理ということでもある。

「蓮華」は、仏の完全なる教えを象徴する。

「経」とは、仏の全ての説法であり、全ての仏教的価値であり、全ての仏教思想である。他の経典に述べられた真理は全て法華経に含まれるというのが、智顛の信念であった。

八世紀前半に、法華経は天皇によって「護国経典」の一つと位置づけられた。この事実が意味するのは、法華経の占める特権的な地位が認識されたということである。

日本天台宗の開祖は最澄（七六七〜八二二、伝教大師）である。最澄によれば、仏教的宗教国家思想に合致した国家が「鎮護国家」と呼ばれる。最澄自身の用いた表現では「守護国家」である。<sup>(3)</sup>

菩薩の「十八不共法」（菩薩のみが有する十八の特徴）によれば、菩薩は即位式の折に帝王の頭に水をふりかける（灌頂する）<sup>(4)</sup>。それ故、菩薩の実践が向かう対象に

帝王（全国土と同一視される）が含まれることは極めて自然に見える。菩薩を天台宗の僧——最澄は「国宝」と呼んだ<sup>(5)</sup>——と同一視することで、「大日本国」を救済する「菩薩僧」<sup>(6)</sup>の権利が示される。

「国宝」の働きは、宗教制度を通じて実現される。それは、僧侶の組織と天台宗の中心である延暦寺に所属する寺院とから成る。最澄は、「菩薩僧」と世俗の権威との相互作用に適切な規定を与えている。彼は、天皇への上書の中で、天台宗の僧侶を後見する俗人（俗別当）<sup>(7)</sup>を任命する必要を強調している。

天台宗僧侶集団の活動に対する俗権による統制を構想した時、最澄は俗別当が僧侶の操り人形と化してしまふとは考えもしなかったが、それは最澄の死後十年ほど経つと現実のものとなった。

権威を世俗の権威と精神的権威とに分ける最澄の思想には、宗教的権威と政治的権威を対置し、前者を完全なもの、後者を不完全なものとする意図が見てとれる。それ故、個人（皇帝）および国土・国家全体の救済は、天台宗の「菩薩僧」の使命であり、彼らのみがな

しうることとされるのである。

つまり、最澄が展開した天台宗の構想と普遍的救済についての思想は「普遍教会」<sup>(8)</sup>（Universal Church）の思想に他ならない。天台教学の「普遍的」性格は、天台宗による統合作用を強めるものである。

日蓮宗は、いわゆる「鎌倉新仏教」の三つの潮流のうちの一つである（他の二つは浄土宗と禅宗）。イデオロギー的には、武士階層（侍）に結びついている。

この宗派の開祖である日蓮は、おそらく仏教史の中で最もカリスマ的な人物である。彼の生涯は、彼が生きた時代同様、激しくダイナミックなものであった。そして、彼がとりわけ容赦なく批判したのは浄土宗と禅宗であった。

日蓮は一二二二年に安房国東条郷小湊という小さな村に生まれた。彼が生まれた月日は分らないが、伝統的に二月十六日とされている<sup>(9)</sup>。彼の父は「権守」すなわち領主の代官であった<sup>(10)</sup>。鎌倉初期には、こうした役人は海辺の村では大きな力を持っていた。しかし、日蓮は繰り返し彼自身を「海辺の旃陀羅が子」<sup>(11)</sup>と述べ

ている。旃陀羅（チャンダーラ）は、インドのカースト制で最も下賤とされる不可触賤民で、異民族との混血によって生じたとされる。このようにして日蓮は自分の出自が最下層であることを強調している。しかし、ここにはもう一つの側面がある。旃陀羅とは、厳密に言えば、シュードラ（奴隸）階級の父とブラーフマナ（祭祀者）階級の母との間に生まれた子である。この意味からすると、日蓮が伝えたかったのは、おそらく、彼の父は庶民であったが、母は貴族の血を引くものであったということであろう<sup>(12)</sup>。

後になると、日蓮は彼の出生地の独自性を強調するようになる。安房の地は天照太神が初めて住した地である。それ故、日蓮は彼自身に神道の主要神である天照太神の庇護のあることを熱望し、それによってさらに彼のみが日本の救済者であることを強調する。日蓮——太陽と蓮華——という名前そのものが、彼の生誕地と天照太神（太陽の神）との関係を想起させるのである。

しかし、同様の方向性は、日蓮において神と仏との

「統合」が求められ、仏教の諸尊と神道の神々と同時に庇護を得ようとしたことについても言えるであろう。日蓮のこの決断は成功したと言わねばならない。というのは、この場合、日蓮は仏教徒とともに伝統的宗教の支持者からも後援を得られたからである。

日蓮宗は同時代の他の宗派と同様、僧侶と在家とから成っていた。日蓮は、僧侶と在家とをともに「門下」と呼び、両者を差別することはなかった。日蓮が新しい信者を獲得する基本的な方法は折伏であった。「折」とは、無知（無明）にとらわれた人々の誤りを破ることである。「伏」とは、悪人や悪い教えを滅ぼすことである。折伏は摂受と対置される。摂授は共感（慈悲）にもとづく救済で、この意味では、より仏教的な方法である。

他の仏教指導者たちと異なり、日蓮は折伏に力点を置いた。それをを用いることは、仏教の中で他の教えに対する厳しい批判を正当化し、自己の見解を絶対化するものであった。日蓮は、浄土宗をはじめとする同時代のほとんど全ての宗派に対する断乎とした禁圧を要

求した。というのも、日蓮の考えでは、それらの教えにしたがうことは日本に不幸を招くからである。

最澄同様、日蓮も法華経を仏教の中心経典と考えた。中国・日本の天台宗および日蓮宗において、法華経を二つの部分に分けることは共通に受け入れられた教理である。前半の十四章は「迹門」であり、後半の第十五章から第二十八章までは「本門」と呼ばれる。

「迹門」においては、二つの重要な教えが述べられる。全ての衆生の成仏の可能性と、成仏のための様々な方法の存在とである。法華経の第二章は「方便品」であるが、この「方便（ウパーヤカウシャリヤ）」とは「巧みな手だて」という意味である。

この章では、「三乗」（三つの乗り物）について語られる。このうち、声聞乗と独覚乗は小乗仏教の支持者であり、菩薩乗が大乗仏教の理想である。しかし、法華経の中で釈尊は、真実には一仏乗しか存在しないと説くのである。

「方便」という考え方からすると、法華経に示される真理は、それを聴く者の理解力のレベルに応じて説

かれねばならない。そうでなければ、真理は理解されず拒否されてしまうからである。

智顛と中日両国の天台宗は第一義的には「迹門」を指針としており、「本門」を特別扱いしてはいない。日蓮の独自性は「本門」を強調する点に示されている。「本門」では、仏の「永遠のいのち」と「地涌の菩薩」とについての教えが最高の価値を持つ。釈尊によれば、「地涌の菩薩」こそが法華経を守護し弘めるのである。

『治病大小権実違目』の中で、日蓮は天台思想の中に「理」と「事」という二つのあり方があることを示している。<sup>(13)</sup>

「事」とは、法華経を信じることで、「末法」の災難から国家と人民を救済することである。「理」から「事」へと移行する時は、日蓮によれば「五知（宗教の五綱）」によって規定される。ここには「方便」の思想が反映していると筆者は考える。

一、教。全ての仏教思想についての知識であり、最も重要なのは、小乗によっては救済が不可能であると理解することである。

二、機。「仏教を弘むる人」は弟子たちの理解力を知り、それにもとづいて法を説かねばならない（これは、人に関する「方便」である）。

三、時。人間世界が位置する「時代」についての知識（時代に関する「方便」）。

四、国。「仏教を弘むる人」は、法を弘めようとする国の特徴を知るべきであり、それに応じて（授けか折伏か）適切な方法を選んで仏教信仰へと導くべきである（国についての「方便」）。

五、序（教法流布の先後）。当該の地域にどのような仏教の教えが既に広まっているのか、どのような思想が浸透しているのかについての知識（思想についての「方便」）。

この五綱を知る人は「日本国の国師」となると日蓮は言う<sup>(14)</sup>。

日蓮は自らが日本の救世主であり、最高の智慧を持つ者であり、法華経に示された釈尊の教えの精髓を体得した唯一の人間であると宣言した。彼の考えでは、彼は普遍的な調和の達成という計画を実現すべきもの

として提示したのである。この目的のためには「三大秘法」に帰依することが必要であると彼は主張する。

第一の「秘法」は、信仰の対象である「本尊」である。一般的に言えば、「本尊」とは神聖な場所に置かれた仏（や菩薩・神）の像や図像であり、信仰の対象となるものである。日蓮にとつての本尊（御本尊）とは、聖なる五つの文字（妙法蓮華経）を書写したものである。信仰の主要対象としての御本尊は日本の各住民のところになければならぬ。こうした個々の御本尊とは別に、日蓮は一国ならびに全世界の信仰の対象となる「大御本尊」を顕している。

第二の「秘法」は、本尊を安置した「戒壇」である。伝統的には、戒壇とは見習い僧（沙弥）が律を受けて正式な僧侶（比丘）となる場所である。日蓮によれば、戒壇とは「帰命の場所」であり、それは単に見習い僧だけでなく、在家者にとつてもそうである。すなわち、日本の住民全てにとつての戒壇であり、全てのものを統一する場所なのである。

第三の「秘法」とは、「南無妙法蓮華経」の題目であ

る。この言葉は祈りの言葉である。題目によって、人は自身の中に仏界を開くのである。

日蓮の宗教政治思想は最澄の思想に似た地点から出発する。日蓮の解釈にもとづく法華経信仰は国家のイデオロギーにならない。御本尊と戒壇は、このイデオロギーを社会に注入するために用いられる。政府は、宗教制度が適切に機能するよう補助しなければならぬ。「南無妙法蓮華経」という祈りの言葉は、日本の住民にとって信仰の「道具」である。

日蓮とその宗派は、この宗教国家の中心とならなければならぬ。最澄の「菩薩僧」は一人ではない。それは天台教団の一員である。しかし、日蓮は自ら「日本の柱」であることを強調する。日蓮に率いられた宗派は正法を護持し、国内の全ての宗教的（および政治的）組織を監督しなければならない。それ故、国内の世俗的権威は精神的権威に従属する。そして、日蓮の宗派は国家の最高の主権者となるのである。

「南無妙法蓮華経」という祈りの効果は、国家の後援で建設され機能する御本尊と戒壇とがある場合にのみ、完全に達成される。自身の中に「仏界」を開くことができる。それが全ての国に法華経信仰を弘める動機を与えるはずである。その弘教は、最も無教育な在家者にも及ぶのである。大御本尊とその戒壇は、個々の御本尊と各地の戒壇をまとめて一つに結びつける。個々人は、法華経を信奉し、みなで御本尊を信仰し、寺（戒壇）を訪れ、単一の祈りの言葉（題目）をとなえることで、統一的なシステムの中に包摂されることになる。

日蓮によれば、この宗教国家の規範に合致した国家が「立正安国」である。<sup>(15)</sup> このような定義は同時に「静謐」で「守護」された自然を前提としている。こうした社会と自然との調和は、宗教国家が機能するために必要な条件であり、その結果でもある。

日蓮は信の働きをはっきりと強調する。多くの宗教にとって不可欠なもの——祈りの言葉（題目）と聖なる図像（御本尊）——は彼の教義の基本的な構成要素となつた。別の言い方をすると、日蓮の宗派が関心を持つたのは、涅槃を得るための唯一の道として信を強調す



るような方向性の仏教であった。

信の価値を強調することで、日蓮の教義は浄土教に近接する。もちろん日蓮自身は類似性を決して認めないであろうが。一方、日蓮教団における御本尊は機能の上から言うと言宗の曼陀羅と同じである。

さらに、『観心本尊抄』の中で日蓮は次のように述べている。

「其の上仏教已前は漢土の道士・月支の外道・儒教・四韋陀等を以て縁と為して正見に入る者之れ有り、(中略)<sup>(16)</sup>例せば独覚の飛花落葉の如し教外の得道是なり」

この一節で、日蓮は他の教えにおける真理の存在を語っている。そして、最後の一文はまるで禅の祖師のようである。

天台宗と比較した場合、日蓮の思想変化の全般的方向性は、日蓮の教えを全国規模のものに、すなわち大衆宗教に転換しようとする課題によってもたらされた。最澄と彼の後継者たちは、貴族である「俗別当」の後見を受けるにとどまったが、日蓮ははるかに広大な同

時代の日本社会の在家者を頼りとした。しかし、彼らの学識はとても低く、平安貴族の学識とは全く比較にならなかった。それ故、「信」を前面に立てることは、仏教思想家として日蓮が立つ上での自然の結果であった。

つまり、仏教思想家・宗祖としての日蓮の活動のパトス(情念)は、普遍的救済の教義を創造することにある。「三大秘法」は個人と国家とを救う手段である。しかし、日蓮にとっても、その後継者たちにとっても、歴史状況のため、計画を部分的にでも実現することは不可能だった。しかし、歴史が示すとおり、日蓮の思想は常に人々の心を高揚させてきたし、現在もそうであり続けているのである。

注

(1) 『長阿含経』巻二十二(大正一・一四九下)によると、人々の争いを裁定するため、民衆の願いによって初めて王(民主)が立てられたと言う。

(2) (原注) Balkrishna Govind Gokhale, 'The Early Buddhist View of the State,' JAOS v.89 1969 No.4



- (3) 著者は「鎮護国家」を「平和にされ守護された国 (pacified and defended state)」と解しているが、この語は「(經典などの力で) 国家を鎮護すること」と解するのが普通である。最澄が「守護国家」(著者の解釈では「守護された国 (protected and defended state)」) について述べているのは「八条式」(『山家学生式』)の「令法久住。守護国家」「住持仏法。守護国家」などの表現であるが、これも「国家を守護せん」と読み下すのが普通である。また、律令において「国家」とは天皇個人を指す表現であることも注意を要する。
- (4) 『宝雨経』卷四(大正蔵二六・三〇一下)によれば、菩薩が灌頂するのは、「一切法王位(仏としての地位)」を受けた時であって、一般の王に対して灌頂をするわけではない。
- (5) 『六条式』(『山家学生式』)によれば、天台宗で十二年の籠山修行を終えた者のうち弁舌・実践ともにすぐれた者のこと。弁舌のみのは「国師」、実践のみのは「国用」とされた。天台宗僧必ずしも「国宝」ではない。
- (6) 最澄は、『山家学生式』『顕戒論』などで、大乘の僧は小乗の律を受ける必要はなく、大乘戒(梵網戒)のみで僧侶の資格を得ると主張し、このような大乘の僧を「菩薩僧」と呼んでいる。
- (7) 「八条式」(『山家学生式』)では「凡そこの天台宗の院には、俗別当兩人を差(つか)わし、番を結んで檢校を加へしめ、兼ねて盜賊・酒・女等を禁ぜしめ、仏法を住持し、国家を守護せん」とある。
- (8) 教会は一つであり普遍であるというカトリックの思想。大石寺四世・日道の『三師御伝土代』に「貞応元年二月十六日誕生なり」(『富士宗学要集』第五卷一頁)とあり、信憑性の高い伝承である。
- (9) 日蓮の父を「權守(權頭)」とするのは、『法華本門要鈔』(『昭和定本日蓮聖人遺文』二二五八頁)にもとづく。本書は日蓮真撰ではないが、日蓮宗初期の伝承を伝えているものとされる。
- (10) 『佐渡御勘氣抄』(『日蓮大聖人御書全集』(以下、御書)八九一頁)。
- (11) いわゆるカースト制度は、ブラーフマナ(婆羅門。祭祀者)・クシャトリア(王族)・ヴァイシヤ(商人)・シュードラ(奴隸)の四階級で構成される。『マヌ法典』一〇・一二及び一〇・一六によれば、シュードラの男とブラーフマナの女の間に生まれるのがチャンデーラであり、「人間の中で最低」とされる。もっとも、日蓮がこのようなインド社会の規定を知っていたかは疑わしい。『法華経』「法師品」には「又た旃陀羅、及び猪羊鷄狗を畜い、畋獵し漁捕する諸の惡律儀に親近せざれ」(創価学会教学部編『妙法蓮華経並開結』四二四頁)とあり、湛然『摩訶止観輔行伝弘

決」には「旃陀羅、此こには殺者と翻す」（大正蔵四六・四三〇中二九）とある。日蓮や中世の日本人にとつて、「旃陀羅」とは漠然と狩猟や漁労に携わる下層民といった認識であったと思われる。

(13) 「一念三千の観法に二つあり一には理・二には事なり天台・伝教等の御時には理なり今は事なり」（御書九八八頁）。

(14) 「已上の此の五義を知つて仏法を弘めば日本国の国師と成る可きか」（『教機時国抄』、御書四四〇頁）。

(15) 原文 state which validity and calmness are established. 筆者は「立正安国」を「正しさと安らぎが立てられた国」として解釈しているようである。

(16) 『観心本尊抄』（御書二四二頁）。

(S・H・シヨマクマドフ／ロシア科学アカデミー

東洋学研究所研究員)

(訳・まえがわ けんいち／東洋哲学研究所研究員)